

メディアに対する先有知覚の学年間比較

Comparative Study of Preconception to Communication Media

後藤 康志

Yasushi GOTOH

新潟医療福祉大学

Niigata University of Health and Welfare

メディア特性の理解を「そのメディアがいかなる特性を持っているのかの知覚」と捉え、その学年発達を明らかにするためにメディアに対する先有知覚の学年間比較を行った。小学校5年生 210名、小学校6年生 389名、中学生 373名、高校生 402名、大学生 401名を対象とした先有知覚調査の結果、次の点が示唆された。①学年が上がるにつれてメディアの特性をより明瞭に把握できるようになる、②インターネットの知覚を見ると、大学生は「インターネットは速報性があり、簡便だが信頼性は低い」と知覚する傾向があるのに対して、小学生は「インターネットの速報性はそれほどでもなく、信頼性は高く、難しい」と知覚する傾向がある。こうした知覚の背景には、操作の経験や効用感を感じる場面の経験が作用していると考えられる。

キーワード：メディア・リテラシー、先有知覚、発達、学年間比較、インターネット

1.はじめに

本研究は、メディア選択の背景にあるものとして「そのメディアがいかなる特性を持っているのかの知覚」、すなわちメディアに対する先有知覚に焦点を当て、その発達のな特徴を明らかにしようとするものである。

複数のメディアが利用可能な現在、メディアの特性をいかに把握するかは重要な問題である。多くのメディア・リテラシーの定義にはメディア特性の理解に関する記述がある。文部科学省の定義には「メディアの特性を理解し、それを目的に適切に選択し、活用する能力（文部科学省2002:62）」とある。水越伸(2002)は、メディア・リテラシーの定義として「メディアを選び、使いこなして自分の考えていることを表現し、コミュニケーションの回路を生み出していく」ことを挙げている。また水越敏行(2002:97)はメディア・リテラシーの構成要素として「メディア、(機器)がどんな特性を持っているか」を挙げている。

例えば山口らはメディア・リテラシーを「メディア活用センス」と捉え、情報の収集と伝達におけるメディアの長所と短所をあげさせている(山口・木原1993:24)。園屋(2002)も「メディアの特徴(長所、短所など)」を意識化する活動をメディア・リテラシー教育に織り込んでいる。こうした適切なメディアを利用

するという実利的な側面はあるだろう。しかし筆者は、メディア特性の理解は、単に状況に適合したメディアを選択し使い分けるといった行動のレベルに留まらないものとして捉えたい。メディア特性の理解は明示的な知識として伝達可能なものとしてではなく、本人も意識化することが難しいような暗黙的なものとして考える。例えば斎藤(2002)はメディア・リテラシーを「各個人のなかに確立されるメディア観」と呼んでいる。メディア観とは、おそらく本人でも意識化できないし、言語化することもできない。メディア特性の理解は、経験を通して獲得される。永田ら(永田・鈴木真理子・木原・水越敏行1994)は「センスとしてのリテラシー」という表現を用いている。

こうしたメディア特性の理解の測定としては、「メディア使用の難しさ」、「メディアからの経験」、「メディアからの情報の信頼性」についての学年間比較を行っている(鬼頭2003,2004a,2004b)、NHK放送文化研究所調査における小学生・中学生・高校生を対象としたメディアの効用感(無藤・白石1999)、インターネットユーザーと非ユーザーのメディア効用感の比較(中野2000)などがある。またメディアに対する態度ではFuru(1971)、生田(1988)、生田・木原(1999)の研究もある。

筆者はメディア特性の理解の一側面としてメディア

に対する先有知覚研究を蓄積してきた。佐賀(1995,2000)は1960年代に行われたメディアの比較研究を整理したチュートとシュラム(Chu & Schramm 1967)を引用しているが、それによると望ましい条件を整えば人々はテレビから学ぶことができ、そしてその学習に影響を及ぼす諸要因のうち最も重要なのは「学習者の学習への積極的参加」であるという。本研究が主体的態度を構成要素の一つとしてあげているのも、これと通じるものである。

クラーク(Clark 1983)は、メディア比較研究を総括し、「現在ある最善の証拠は、メディアは教授内容を運ぶ単なる媒介物であって、薬品を運ぶトラックが、われわれの栄養状態に変化をもたらすこと以上に生徒の学習達成には影響を与えない」と結論づけている。将来の研究が学習成果に影響を及ぼすのはメディア自体ではなく、メディアに対する性格付けや思い込みに関する変数を追求する必要があることを指摘している。

サロモン(Salomon 1981,1983,1984, Salomon & Leigh 1984)は、課題や材料や場面に関して知覚された要求の性格(難しさや易しさ)は知覚された自己効力感に関連し、その両方が、課題に対して費やされた心的努力の量に影響し、それがさらに学習に影響するという学習モデルを組み立て、検証を試みている。メディアに対する先有知覚(メディアに対する好みや難しさの知覚)は、学習成果に影響を及ぼす一つの要因として提案されている。

クレンドル(Krendle 1986)は「テレビを見る」、「コンピュータを使う」、「本を読む」、「文を書く」という4つのメディア活動について、好み、難しさ、学習期待という3つの次元で調査を行っている。

佐賀(1988,1993)や白(1991)はこれに「教師の話聞く」という活動を加え、5つのメディア活動についてクレンドルと同様に3つの次元で調査を行っている。これらの研究から、アメリカでは「難しいと思われるメディア活動からは学習できる」と思われているのに対して日本と韓国では「難しいと思うメディア活動からは学習しにくい」と知覚されていること、性差や知的要因よりも学級差が顕著であることなどが示唆されている。この学級差は、学級における学習の経験の差であり、教師の指導法に他ならない。

今井(1993)と李(1994)は、これらを拡張して教科における先有知覚の存在を明らかにした。

筆者らによる先有知覚研究はこれらの研究を発展させたものである。先有知覚研究の結果は、子どもはメ

ディアの利用経験が豊富になることで、メディアの特性をより明瞭に峻別できるようになることを示している(後藤・生田1998a,1998b,Ikuta & Gotoh2001, Ikuta & Gotoh2002, 生田・後藤2003a)。しかし、これらの研究は個別の対象について行われてきたものであって、小学生から大学生までを対象とした学年間比較という形では行われてこなかった。

2. 目的

本研究は、メディアに対する先有知覚の学年間比較により、メディア特性の理解の学年の発達を明らかにする事を目的とする。

メディア特性の理解は、メディアの特性を把握してそれらを機能的に使い分けるといったような実利的な側面で語られることが多い。しかし、メディア特性の理解とはもっと内面的であり、本人でさえ自覚できないような感覚的なものと捉えられる。こうした感覚はメディアの利用経験によって様々に異なるものであり、メディア経験が豊富になるにつれて変化するものと考えられる。本研究ではこうしたメディア特性の理解を把握するためにメディアに対する先有知覚を取り上げ、学年間比較を行う。

3. 方法

3.1. 調査対象と手続き

調査対象は小学校5年生210名,小学校6年生389名,中学生373名,高校生402名,大学生401名,合計1775名である。調査時期は2005年6月である。対象校はN市及びその周辺市町村の学校であり,コンピュータやインターネットの環境には若干のばらつきがある。担任教師ないしは授業担当者に対してテストではないので正直に自分の考えを書いて欲しいことや,全員が回答を終えるまで時間を確保して欲しいことを記載したマニュアルに従い,一斉に回答してもらった。分析にはSPSS 11.05Jを利用した。

3.2. 先有知覚の調査

Ikuta & Gotoh(2001),後藤・生田(1999)の項目を一部改変し利用した。「本を読む」、「新聞を読む」、「テレビを見る」、「コンピュータを使う」という4つのメディア活動を3つの次元(速報性,嗜好性,簡便性)で一対比較法により調査する。一対比較における4つのメディア活動の可能な組み合わせからそれぞれの活動

を選んだ回数（最高は全ての対で選択された場合で3回、最低はどの対でも選択されない場合で0回）を測度とする。

4. 結果

4.1. 全体的な傾向

(1) メディア活動間の距離の分析

メディア・リテラシー調査の結果をみていこう。メディアに対する先有知覚調査の項目を利用した。「本を読む」、「テレビを見る」、「新聞を読む」、「インターネットを使う」という4つのメディア活動について、速報性（情報が新しい）、正確性（信頼できる）、嗜好性（好む）、簡便性（簡単に情報が得られる）という4つの次元で、一対比較法で調査した。

データをサーストンの一対比較法（ケースV）によって尺度化した。全体的な傾向を示したのが図6-5である。

速報性の次元ではもっとも速報性の低いと知覚されているメディアが原点であり、原点から離れるほど速報性が高いと知覚されている。本がもっとも速報性が低く、かなり離れて新聞、さらにかなり離れてネットワークとテレビという順番になっており、妥当である。

信頼性の次元では最も信頼性が低いメディアが原点に位置し、原点から離れるほど信頼性が高いと知覚されている。これを見るとインターネットと本が最も信頼性が低いと見なされている。これは意外な結果であった。本は他のメディアに比べても信頼性が高いと思われるからである。可能性としては、本を図書ではなく、娯楽雑誌類と捉えていることが考えられるが、このデータからでは判断できない。インターネットについては、テレビ・新聞などのマス・メディアとは一線を画している。信頼性の次元ではメディア活動間の距離が短く、他の次元に比べてメディアを明瞭に峻別できていない。

好みの次元では、原点に最も好まれていないメディアが位置し、原点から離れるほどより好まれる。これを見ると、新聞・本が好まれておらず、インターネットが好まれており、テレビが非常に好まれている。

簡便性の次元では、もっとも簡便でないメディアが原点に位置し、簡便なメディアほど原点より離れる。本、新聞といった従来型のメディアに比べて、

インターネットやテレビが簡便と思われている。

メディアで見ると目に付くのはテレビであろう。速報性があり、好まれ、簡便に情報を得られる上に信頼性も高いという結果になっている。インターネットは速報性があり、好まれ、簡便だと思われているが、信頼性は低いとみなされている。実態としてインターネットの情報はまさに玉石混濁である。信頼性が高いものから全く信頼性の低いものまで様々で、そのことは知覚されているようである。

(2) 先有知覚の構造

次に、先有知覚の構造を検討するために先有知覚の選択回数を測度として相関分析を行った。

まず本である。全てのペアにおいて1%水準で有意な相関があるが、相関係数自体を見ると、簡便性と速報性、好みと簡便性、好みと速報性で弱い正の相関がある。全体的に弱い相関ではあるが、好むメディアほど簡便で、信頼性があると考えられる傾向がある。テレビであるが、全ての対で有意な相関があり、テレビを好むほど簡便で、速報性もあり、信頼性も高いと考えている。しかし、本の場合と同じように相関係数自体はそれほど高くはなく、弱い相関である。新聞であるが、全てにおいて1%水準で有意な相関があり、全体として好む者ほど簡便で、速報性、信頼性が高いという傾向が見られる。ただし、相関係数自体は高くはない。

これらに対して、インターネットは明瞭な相関が見られる。特に、好みと簡便性、速報性と簡便性、速報性と好みでそれぞれ.3以上の中程度の相関が見られており、インターネットの操作が苦にならない、簡便と思う者にとっては、インターネットは好まれ、速報性もあると捉えられている。

まとめると、次のようになる。

テレビは速報性があり、好まれ、簡便に情報を得られる上に信頼性も高いと知覚されている。対してインターネットは速報性があり、好まれ、簡便だと思われているが、信頼性は低いとみなされている。また、好むメディアほど簡便で、速報性や信頼性も高いと見なす傾向があり、特にインターネットではその傾向が顕著である。これらの結果は、これまでの先有知覚研究の成果を支持するものである。

4.2. 学年間の比較

(1) メディア活動間の距離の分析

小学5年生から大学生までのメディア活動間の距離を示す(図6-6、6-7、6-8、6-9、6-10)。

これらの結果を総括すると、全体的に学年進行に従ってメディア活動間の距離が広がっていることがいえる。先行研究からも、メディア経験が豊富な学級と、それほどメディア経験が少ない学級を比較した場合、メディア経験が豊富になるに従い、メディアの峻別が明瞭にできるようになることが明らかになっている。結果は先行研究を支持する。

全体的にみると、個々のメディアの順序にはそれほど大きな差はないが、大学生の信頼性の次元では、高校生までと異なり、インターネットが最も信頼性の低いメディアとしてあげられているのである。後述するが、大学生はインターネット情報に対する批判的思考の技能が高い。インターネットをそれほど信頼性がないメディアとして見なす背景に、こういった批判的思考の発達が発作用している可能性がある。

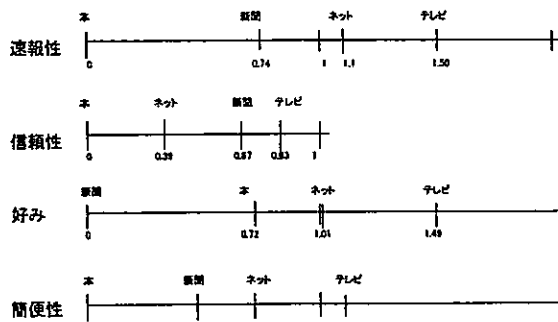


図1 小学5年生のメディア活動間の距離

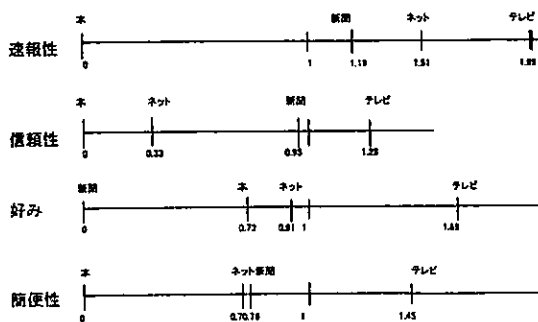


図2 小学6年生のメディア活動間の距離

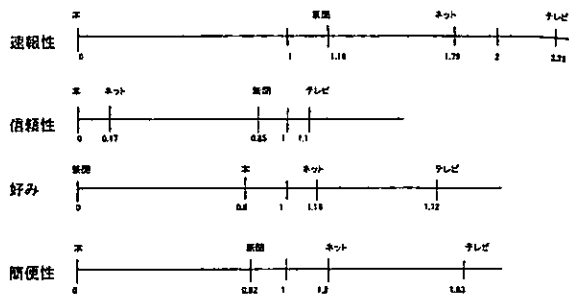


図3 中学生のメディア活動間の距離

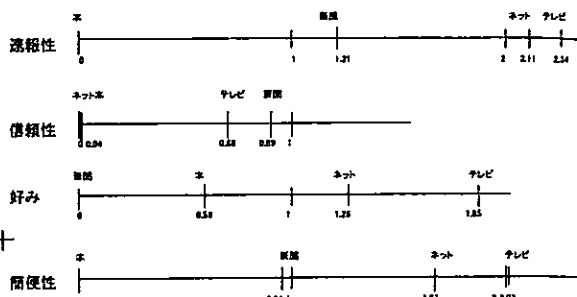


図4 高校生のメディア活動間の距離

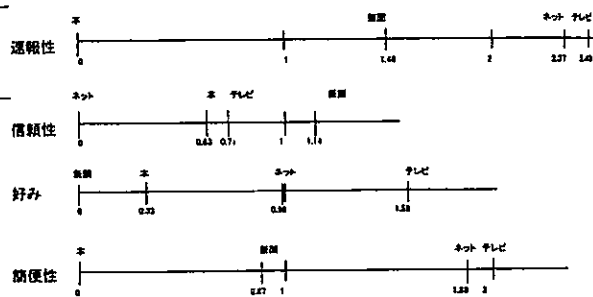


図5 大学生のメディア活動間の距離

(2)メディアの選択回数比較

メディアの選択回数を測度として、平均値差の分散分析を行った。5%水準で有意な差があるものについてシェッフェの事後検定を行った。選択回数の平均値差を比べることで、どのメディアをどう知覚しているかを学年で比較するためである。

① 速報性

速報性については、本<新聞<テレビ=インターネットというように判断することが妥当と考えて、結果を読み解いていく。選択回数平均値の事後検定をみていく(表6-4)。

インターネットであるが、小学5年生(1.85)、小学6年生(1.87)<中学生(2.07)<高校生(2.37)、大学生(2.43)と明瞭に分かれている。高校生・大学生はインターネットの速報性に対する認知が明瞭であり、小学生は相対的に低い。

テレビの速報性についてみると、大学生(2.27)、高校生(2.32)、小学5年生(2.34)<小学6年生(2.49)、中学生(2.50)という有意な差が見られた。

本と新聞はどうであろうか。本の速報性については、大学生(0.9)、高校生(0.9)、中学生(1.3)<高校生(0.9)、中学生(1.3)、小学6年生(1.8)<小学5年生(4.3)で有意な差があり、新聞については高校生(1.19)、大学生(1.22)、中学生(1.28)<大学生(1.22)、中学生(1.28)、小学5年生(1.34)<小学5年生(1.34)、小学6年(1.47)という差がある。一貫して高校生・大学生は本・新聞には速報性がないと知覚しているのに対して、小学生はそういった峻別が明瞭にできていない。

全体をまとめると、大学生・高校生はいずれも安定的にインターネットやテレビを速報性の高いメディアと知覚し、本・新聞をそれに比較すれば速報性は高くないと知覚している。小学生については全く逆である。すなわち、学年発達に従いメディアの速報性を正しく知覚している傾向にある。

② 信頼性

信頼性は「本だから正確」「インターネットだから不正確」というように一概は決められない。しかし、長期間にわたって時間をかけて作成される図書、公共性が高い新聞は信頼性が高く、時間的な制約がきつく視聴率を稼ぐために絵になるニュースが優先されるテレビは図書や新聞よりは劣り、誰でも発信できるインターネットは相対的に信頼性が低いと考え、結果を読み解いていく(表6-5)。

本の信頼性については小学6年生(62)、中学生(76)、小学5年生(81)、<小学5年生(81)、高校生(99)<大学生(1.52)という差がある。大学生は本を信頼性が高いと考えている。

新聞についてみると、小学5年生(1.79)、小学6

年生(1.89)、中学生(1.93)<高校生(2.18)、大学生(2.24)である。高校生・大学生は、中学生以下に比べると新聞の信頼性が高いと見なす傾向にある。大学生は本・新聞といった活字メディアに信頼を置いていることがわかる。

テレビの信頼性については大学生(1.61)<高校生(1.91)、小学5年生(2.05)<中学生(2.31)、小学6年生(2.40)であり、インターネットについては大学生(62)<高校生(91)、中学生(98)、小学校6年生(1.06)<小学5年生(1.34)である。大学生はテレビやインターネットといった電子メディアに対してそれほど信頼をおいていない。他方、小学生・中学生は、大学生に比較するとテレビの信頼性は高いとみなしている。

このような結果から判断するに、学年発達に従ってインターネット情報の信憑性に対する「見る目」が培われていくとよいであろう。

③ 嗜好性

好みの次元についてみていこう(表6-6)。本については、大学生(96)、高校生(1.05)<中学生(1.32)、小学6年生(1.35)、小学5年生(1.37)である。前に述べているが、小・中学生は本について雑誌類をイメージし、大学生は図書をイメージしている可能性はある。

テレビの好みについてみると小学5年生(2.35)、中学生(2.45)、小学6年生(2.50)<中学生(2.45)、小学6年生(2.50)、高校生(2.57)、大学生(2.57)となっており、学年による差は明瞭にはなっていない。

新聞の好みであるが、選択回数自体は4から6でありほとんど好まれていない。中学生(40)、高校生(45)、小学5年生(48)、小学6年生(51)<高校生(45)、小学5年生(48)、小学6年生(51)・大学生(60)となっており新聞を好まない中学生、比較的好む大学生という違いがあるかも知れない。小学校については、高学年では学級指導などで新聞を利用することは一般に行われており、対象校でもそのような傾向がある。メディア接触データからも新聞に多く接触していることから、新聞に対する好みが高い可能性はあるだろう。

最後にインターネットに対する好みであるが、小学6年生(1.62)、小学5年生(1.79)、中学生(1.81)<小学5年生(1.79)、中学生(1.81)・大学生(1.85)・高校生(1.92)となっている。

全体として、好みについては学年発達による一貫した傾向は見られない。

④ 簡便性

次に簡便さについてである(表6-7)。本については大学生(20)、高校生(21)、中学生(33) < 小学6年生(52) < 小学5年生(68)となっている。前に述べているように、小学生は本を雑誌類や読み物類を含めている可能性がある。これに対して高校生・大学生は20前後である。レンジは最低0から最高3であるから非常に難しいと知覚している。

新聞の簡便さであるが、大学生(1.10)、高校生(1.19) < 高校生(1.19)、中学生(1.32)、小学5年生(1.34) < 小学6年生(1.55)である。高校生・大学生は活字メディアの難しさを実感している。

テレビの簡便さでは、小学5年生(2.23) < 大学生(2.39)、高校生(2.45)、小学6年生(2.46)、中学生(2.53)となっており、小学5年生とそれ以上の間に差がある。

インターネットの簡便さであるが、小学6年(1.45) < 小学5年(1.73)、中学(1.80) < 高校生(2.13)、大学生(2.29)という明瞭な差が見られる。このことは前述のメディア操作スキルの学年発達とも関連しているように思われる。メディア操作スキルは学年と共に明瞭に発達している。つまり、メディア操作スキルが高い高校生・大学生は、インターネットを簡単であると考えている。これに対して、小学生はメディア操作スキルも低く、インターネットを難しいと知覚している。

5. 考察

本章ではメディア特性の理解をメディアに対する先有知覚の視点から捉え、その学年間比較を行った。

先行研究をみるとメディアに対する先有知覚は経験によって大きく変容することが指摘されている。例えばメディアを利用した経験が学習者自身にとって好ましく、やりやすく、有用であればそのメディアを好み、難しくなく、有用であると知覚するといった具合である。筆者らによる先有知覚の縦断的研究・横断的研究では、経験が豊富になるほどメディアの峻別が明瞭にできるようになることを示している。これらから、学年が上がるに連動してメディア特性の理解も発達することが考えられる。

結果を見ると、学年が上がるにつれてメディアの峻別が明瞭にできるようになることが示唆された。速報性、信頼性、嗜好性、簡便性の4つの次元全てについて小学生よりは中学生、中学生よりは高校生、大学生というようにメディアの特性を把握できるようになっている。この結果は先行研究を支持するものである。

速報性の次元では学年が上がるにつれてどのメディアの速報性が高いか、正しく知覚できるようになっている。特にインターネットの速報性の知覚は、学年が上がるにつれて明瞭になっている。信頼性の次元では高校生・大学生が活字メディアに対する信頼性が高いと知覚するのに対して、小学生・中学生はテレビやインターネットの信頼性が高いと知覚している。簡便さでは、大学生は活字メディアを難しく、インターネットを簡便と知覚しているのに対して、小学生はテレビが簡便で、インターネットを難しいと知覚している。

インターネットについてみると、大学生は「インターネットは速報性があり、簡便だが信頼性は低い」と知覚しているのに対して、小学生は「インターネットの速報性はそれほどでもなく、信頼性が高く、難しい」と知覚している。

この背景には次のようなメディア経験が考えられる。大学生はインターネットの操作技能も高いので、速報性、信頼性について判断する経験を積んでいる。このため速報性、信頼性についての知覚が明瞭になる。これに比べて小学生は経験が浅いため、どのメディアがいかなる特性を有しているか明瞭には把握していないのであろう。

多様なメディアが選択可能な現代において、どのメディアを選ぶかは本人次第である。その背景にはこうした本人でも意識していない知覚があり、それは学年に伴い変化しているのであろう。

参考文献

- 白南権 (1991) 韓国児童・生徒の学習メディアに対する先有知覚と原因帰属. 教育工学関連学協会連合第3回全国大会講演論文集, 37-38
- Chu, G.C. & Schramm, W. (1967) Learning from Television: What the Research Says. NAEB, 1979.
- Clark, R. E. (1983) Reconsidering Research on Learning from Media. Review of Educational

- Research. 53,445-459
- Furu, T. (1971) *The Function of Television for Children and Adolescents*, Sophia Univ. 鬼頭尚子 (2003) 子どもたちとメディア. 国立教育政策研究所(編) <メディア・リテラシーの総合的研究>—生涯学習の視点から—国立教育政策研究所紀要,132:13-22
- 後藤康志・生田孝至 (1999a) 受信・発信メディアに対する児童の先有知覚に関する研究. 日本教育工学会誌/日本教育工学雑誌, 23-35-88
- 後藤康志・生田孝至 (1999b) 情報の連結的表現を生かしたマルチメディア活用単元の開発. 日本教育工学会第15回大会講演論文集, 611-612
- 後藤康志・生田孝至 (2003a) 受信・発信メディアに対する子供の先有知覚に関する研究. 日本教育工学会第19回大会講演論文集, 879-880
- 生田孝至 (1988) メディアに対する児童の態度(2). 電子情報通信学会, ET88-4:43-46
- 生田孝至・木原俊行 (1999) インターネットに対する子供の態度—利用経験に着目した比較研究—. 日本教育工学会第15回全国大会講演論文集, 523-524
- Ikuta, T. & Gotoh, Y. (2001) *A study of Children's Preconceptions to Communication Media*. Paper Presented at the Annual Conference of the British Educational Research Association 2001, University of Leeds, England
- Ikuta, T. & Gotoh, Y. (2002) *A Comparative Study of Children's Preconceptions to Communication Media between China and Japan*. Paper presented at the Annual Conference of the British Educational Research Association 2002, University of Exeter, UK
- 今井真悟 (1993) 児童のメディアに対する先有知覚と教師の指導法との関係. 新潟大学修士論文
- Krendle, K. A. (1986) *Media Influence on Learning: Examining the Role of Preconceptions*. Educational Communication and Technology Journal, 34:223-234
- 鬼頭尚子 (2004a) 子どもたちとメディア. 国立教育政策研究所(編) メディア・リテラシーへの招待 生涯学習を生きる力. 東洋館出版. 17-26
- 鬼頭尚子 (2004b) 学校・家庭におけるメディア利用とメディア・リテラシー—児童・生徒及び彼らの保護者と教師の質問紙調査による—. 国立教育研究所生涯学習研究所(編)生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究最終報告書—学校教育編, 65-97
- 水越伸 (2002) デジタルメディア社会. 岩波書店.
- 水越敏行 (2002) 新しい学力としてのメディア・リテラシー—その研究と実践をどう進めるか—日本教育工学会第18回大会講演論文集, 97-100
- 文部科学省 (2002) 情報教育の実践と学校の情報化—新「情報教育に関する手引」—. 文部科学省.
- 無藤隆・白石信子 (1999) 子供のメディア利用と生活行動の変容—小・中・高校生調査による最近の動向と考察—. NHK放送文化調査研究年報, 44:255-315
- 中野佐知子 (2000) インターネットユーザーはテレビをどう見るのか—日本人とテレビ・2000より. 放送研究と調査, 50(11):26-35
- 永田智子・鈴木真理子・木原俊行・水越敏行 (1994) メディア・リテラシー育成カリキュラムの評価研究 (1). 日本教育工学会研究報告集, JET94-2:121-124
- 李季 (1994) 学習メディアに対する中国児童の先有知覚に関する研究. 教育工学関連学協会連合第4回全国大会講演論文集, 25-26
- 佐賀啓男 (1995) 文化とのつながりを求める教育メディア研究. 教育メディア研究, 1(1):44-49
- 佐賀啓男 (2000) メディア教育概念の変遷 教育メディア科学講座—教育メディア研究の流れとメディア教育— <http://ship.nime.ac.jp/>
- Salomon, G. (1981) *Communication and Education: Social and Psychological Interactions*, Sage, Beverly Hills, CA.
- Salomon, G. (1983) *Television Watching and Mental Effort: A Social Psychological View*. In Bryant, J. and Anderson, D.R. (Eds), *Children's Understanding of Television*. Academic Press, 181-198
- Salomon, G. (1984) Television is "Easy" and Print is "Tough". *Journal of Educational Psychology*, 76:647-658
- Salomon, G., & Leigh, T. (1984) *Predispositions about Learning form Print and Television*. *Journal of Educational Psychology*, 34:119-135
- 斉藤俊則 (2002) メディア・リテラシー. 共立出版.

山口好和・木原俊行 (1993) メディア・リテラシー育成方法の検討—中学校社会科・課題選択学習を題材として—。日本教育工学会研究報告書, JET93-4-19-26

水越敏行 (1996) 教育工学の展望。日本教育工学雑誌, 20:1-5

園屋高志 (2002) 大学生に対するメディア教育の試み (5)～「情報メディア論」等の授業実践を通して～。日本教育工学会研究報告集, JET02-3-93-98

付録：調査の項目

(1) 速報性

「情報が新しい」と思うのはどちらですか。() に当てはまる方の番号を書いてください。

- (ア) 「①本を読む」と、「②テレビを見る」では、() の情報が新しい
- (イ) 「③新聞を読む」と、「④インターネットを使う」では、() の情報が新しい
- (ウ) 「②テレビを見る」と、「③新聞を読む」では、() の情報が新しい
- (エ) 「④インターネットを使う」と、「①本を読む」では、() の情報が新しい
- (オ) 「①本を読む」と、「③新聞を読む」では、() の情報が新しい
- (カ) 「②テレビを見る」と、「④インターネットを使う」では、() の情報が新しい

(2) 嗜好性

「好き」なのはどちらですか。() に当てはまるほうの番号を書いてください。

- (ア) 「①本を読む」と、「②テレビを見る」では、() が好き
- (イ) 「③新聞を読む」と、「④インターネットを使う」では、() が好き
- (ウ) 「②テレビを見る」と、「③新聞を読む」では、() が好き
- (エ) 「④インターネットを使う」と、「①本を読む」では、() が好き
- (オ) 「①本を読む」と、「③新聞を読む」では、() が好き
- (カ) 「②テレビを見る」と、「④インターネットを使う」では、() が好き

(3) 簡便性

「かんたんに情報が得られる」のはどちらですか。() に当てはまる方の番号を書いてください。

- (ア) 「①本を読む」と、「②テレビを見る」では、() がかんたん
- (イ) 「③新聞を読む」と、「④インターネットを使う」では、() がかんたん
- (ウ) 「②テレビを見る」と、「③新聞を読む」では、() がかんたん
- (エ) 「④インターネットを使う」と、「①本を読む」では、() がかんたん
- (オ) 「①本を読む」と、「③新聞を読む」では、() がかんたん
- (カ) 「②テレビを見る」と、「④インターネットを使う」では、() がかんたん

(4) 信頼性

「信頼できる」と思うのはどちらですか。() に当てはまる方の番号を書いてください。

- (キ) 「①本を読む」と、「②テレビを見る」では、() がかんたん
- (ク) 「③新聞を読む」と、「④インターネットを使う」では、() がかんたん
- (ケ) 「②テレビを見る」と、「③新聞を読む」では、() がかんたん
- (コ) 「④インターネットを使う」と、「①本を読む」では、() がかんたん
- (サ) 「①本を読む」と、「③新聞を読む」では、() がかんたん
- (シ) 「②テレビを見る」と、「④インターネットを使う」では、() がかんたん